

---

# 揚羽蝶

並盛りライス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

揚羽蝶

### 【Nコード】

N6522A

### 【作者名】

並盛りライス

### 【あらすじ】

ライブハウス「ソルト・ビーンズ」でアルバイトをしていた久次良は、ステージの下で揚羽蝶の髪飾りを見付ける。それはソロシंगाー柚木のものであった。

## 第一話Kサイド「はじまりの揚羽蝶」

ピカピカと光るダイナモライトの下、僕はマイクスタンドの位置を調節していた。

このライブハウスでアルバイトをしながらもう一年近くになる。

観客が入る前の静かで薄暗いホールは、心を落ち着かせるのにはもってこいだ。

客が入るとたちまち、煙草の煙で充満する。半地下構造になっている此処は、空気が溜りやすい。

ちようどスモークを焚いたみたいに真っ白になる。

「お先!!」

カウンターの掃除をしていた樟葉さんは片手を挙げて、店を出ていった。

雇っているバーテンは樟葉さんだけで、形だけアルコールを出す仕事をしている。

基本的に、フリードリンクとチケットがセットになり、客は自ラジューサーの前に並ぶ。

だから、樟葉さんはグラスを洗って出すだけなのだ。

だいたいステージの機器を調節し終えた僕は、次に椅子の整理をしようとしてステージを降りた。

すると、ちょうど一段低くなった所に何か落ちているのが見えた。

よくできた揚羽蝶の模型…髪飾りだ。

一本一本の装飾にきめ細やかな工夫が施されていて、見る角度によつて艶やかさや鮮やかな緑が変化するようだ。

ポケットに入っているハンカチで丁寧に髪飾りを掴んだ。

髪止めの部分は銀で、それだけでも高価な物だと分かる。

「店長。」

奥にいる店長を呼び、髪飾りが落ちていた旨を話した。

店長は、髪飾りを受けとると、じっと観察した。

「これはたぶん…柚木さんというソロシンガーが着けていたやつだなあ」

「柚木？」

「ああ、若いのに艶のある声とよく通るハスキーな声が特徴的だった。確か…最後にステージに立ったのは二週間位、前だったかな」  
店長は、音楽通で大抵の歌手の名前や特徴ならメモを見なくても覚えられる人で…一度出演した人で素質があれば店長の脳にインプットされているといい。

「あゝ、あつたあつた」

出演者リストを抱えて店長が戻ってきた。掃除も一段落していたので、この髪飾りの持ち主に興味を持った。

「へえ、もう三回も出演してるんですか」

「何いつてんだよ、その日はお前も居ただろ久次良。」

「そうでしたっけ？」

あまり覚えていないが、そういえば会った気がしなくてもない。

あの日は、確か…客はまばらで、年輩の客が多かったっけ。

ライブハウスといっても、ただ単に若者の溜り場になっている訳ではなく、いろいろなジャンルを取り入れているから年輩の方がいてもおかしくない。

ジャズやシャンソンなんかだと、そこいらの高級ジャズバーと変わらないくらいの雰囲気になる。

全てあの店長の腕で、この店

「ソルト・ビーンズ」

の運営は成り立っている。

気に入らない客や、歌手は出入りを制限されるし、新しい歌手なんかも、どんどんチャレンジの場を作る。

それがこの店の人気の秘密なのだ。

ホールを見渡して、掃除が完璧かどうかチェックする。

そして、開いたままの出演者リストをめくった。

志津　　柚木

年齢19才

ソロシンガー

職業

ピアノ教室の副講師

過去出演

8 / 5 , 9 / 13 , 12 / 9

.....

今後の予定... 12 / 23 ロスに行く

ロサンゼルス？しかも、明後日か...。仕事だろうか、それともプライベートな用事だろうか...。

揚羽蝶の髪飾りを渡すには明日しかない。

それに、出演者リストには住所を書く欄がなかった。電話番号があるが、こんなことの為にいちいち電話するのは気が引けた。

それに、余計なお節介でこれから彼女が出演するのが嫌になる可能性だってなくはない。

僕は店の金庫の中に、髪飾りをしまつことにした。

「はあ……」

開店まで二時間あるが、特にすることもなかった。

店長が言うには、今日のグループは若者向けのパンクロックで、熱狂的な女性ファンが多いらしい。

名前を聞いたが、僕の知らないグループだった。

このライブハウスで働こうと思ったのは、別に音楽に興味があったわけじゃなかった。

だから、実はほとんど音楽について知らなかった。

ただなんとなく聞いていて上手いと思う歌手がいるくらいだ。

そのグループの短いリハーサルがあつて。

いつのまにか客が入りはじめていた。

そうすると、僕は本当にすることがなくなってしまつてボンヤリとステージからも入り口からも遠くに座っていた。

空気が熱を帯ているのは、客達の息や、体温のせいだ。

半地下に籠つた熱は逃げ場を失つてこの世界を支配していた。

その中で、僕のテーブルは冷ややかに物質の冷たさを残している。

「暑いですね」

十二月のこの時期に暑いなんて、と思つた。

同じようにファンの一団からはずれている女性に声をかけられた。

「あんまり、興味がありません。」

「興味が無い？」

もしかしたら、この人がこのグループのファンなら失礼な言い方だと思つた。

でも、僕はそうではないと思つていた。

「…私も。歌は上手いんですけど…なんか歌詞にこだわりがない気がするな。情性で歌つてみたいな…」

目を細めて悪戯っぽく言う。

確に、歌詞がありきたりというか、単調な気がした。

同意という意味で頷く。



「なんでいつも、そんなに詰まらなそうな顔をしているの？」

「えっ？」

いつも…。

意識してはいなかったが、そうかもしれない。

「本当の音楽を知らないのね」

本当の音楽…そんなものがあるだろうか。  
あるのなら、僕にも分かるだろうか。

「あなた、此处で働いているんでしょ？名前は？」

「…久次良。」

「久次良？ニックネームか何かなの？」

「いや、本名が阿久津 良だから。」

「へえ、上手いこと言うわね」

大人っぽい静かな人かと思ったら意外と喋りやすい人だった。

年齢もたぶん、同じ位なのかもしれない。

「私は、柚木。志津　柚木っていいます。」

もしかしたら、この時柚木さんは髪飾りを探しにこの店に来ていたのかもしれない。

「あつ、あなたが柚木さんなんですか？」

「そうよ、気付かないなんてバイト失格じゃないの」  
記憶の中にある柚木さんの服装は黒いシックなドレスしかなかった  
ので、こんなラフな格好をしているとは思わなかった。

言い訳のようにそういうと

「そんなに私の歌はつまらなかったの…」

柚木さんは、寂しそうに顔を伏せた。

それが妙に、色っぽくて魅力的でドキッとした。

いつのまにか、パンクロックのグループは最後の曲だとMCしていた。

## 第二話kサイド「ピアニスト」

モーターのうだるような音が鳴っている。まるで、それ以外の音が無くなってしまったのかと錯覚するくらい静かな夜。

僕は、後悔していた。志津さんに髪飾りを返すタイミングを完全に失っていたからだ。

自慢にはならないが、僕は社交的な人間じゃない。

接客などは慣れとマニュアルでなんとかなるが、自分から他人に関わるのが苦手な質なのだ。

それなのに、僕は柚木さんの家に居る。

暖かいミルクティーを飲みながら様子を窺うが、肝心の柚木さんは台所で何か作っている。

「音楽について、知りたいと思ったら私の家に来なさい」

柚木さんは、そう言った。そう言ったくせに僕は放置されていた。

本当は、髪飾りを返すのが目的だったのに強引に連れてこられたのだ。

他人の部屋にというのは、目のやり場に困ってしまう。  
さりげない小物や、生活感のある家具をじっと見るのは後ろめたい。

柚木さんは、そんなことにも構わず

「まあ、寛いでてよ」

と言っただけだ。

ふと見ると、ピアノコンクールの賞状が額に入っている。

二位と特別賞。

そんなに大事そうな物なのに、ホコリを被っているのが不思議だ。

「父はね、ジャズピアニストだったの。…はい、ビール。」

渡された缶ビールは、火傷しそうなくらい冷たい。

「だからね、五歳くらいからピアノをやってた。嫌々ね。」

嫌々という言葉に力が入っていた。

「ピアノを弾くのが嫌で嫌で仕方がなくて。ピアノを弾けると思われるのが死ぬ程、嫌だった。」

さっきまで柚木さんが作っていたのは、軽いつまみのようだ。

ベーコンをカリカリになるまで焼いたものと、イカを揚げたものがテーブルに並べられた。

「ほら、小学校とかで合唱大会や文化祭なんかでピアノができる子は絶対やらされるじゃない？」

独りだけ。しかも間違えは許されないっていうプレッシャーが嫌だった。」

「父は、私のためと思って週に一度のレッスンをしてくれてた、でもその日の朝が来ると私は、吐き気がして胃に酸っぱいものが広がった。」

ベーコンをかじりながら話す柚木さんは真剣だった。

僕は、缶のプルタブすらまだ開けていなかった。

「ピアノは…父の呪いのよ。コンクールの前に父は、高価な揚羽蝶の髪飾りをくれた。

呪縛になって私をピアノに縛り付けた。

その後、父が死んだ。死ぬ前に立派なピアニストになれって言うて死んだ。

死んで永遠に私はピアノが嫌いだって、言えなくなった。」

柚木さんは、酔ったように独白していく。

「じゃあ…じゃあ柚木さんはピアノが嫌いなんですか？」

「嫌いよ」

躊躇することなく、はっきりと柚木さんは答えた。

「それならなんで、この髪飾りを捜してたんですか？」

僕は、丁寧にハンカチを開いて美しく翠色の羽をした揚羽蝶の髪飾りを取り出した。

「あなたは、髪飾りを探しにソルト・ビーンズを訪れた。それはなぜなんです？」

純粹な興味から出た言葉だったが、強い調子になってしまった。僕も酔ってしまったのかもしれない。

柚木さんは、少しの間黙ったままその髪飾りを見ていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6522a/>

---

揚羽蝶

2011年1月4日01時45分発行